

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2020 年度
氏名	三ッ井 奈緒	指導教員 (主査)	浅野 憲一

論文題目	完全主義が認知的感情制御を介して強迫傾向に与える影響
------	-----------------------------------

本文概要

1. 問題

強迫症 (Obsessive Compulsive Disorder : 以下 OCD) とは、考えたくないにもかかわらず繰り返し意識に侵入してくる不快な考え (強迫観念) と、それによりもたらされる不快感を軽減するための行為 (強迫行為) によって特徴づけられる精神疾患である。代表的な治療法として曝露反応妨害法が挙げられるが、多数の研究において OCD の難治性が報告されていることを考慮すると、OCD の発症を予防する介入が重要であり、健常群においてもみられる OCD の性質である強迫傾向のリスク要因について検証することは有益であると考えられる。

強迫傾向の代表的なリスク要因として完全主義が挙げられる。完全主義とは、自身の行動に対して過度に批判的な評価をし、完全で極端に高い基準のパフォーマンスをしようとするパーソナリティである (Rice, Suh, & Davis, 2018)。完全主義は OCD に限らず、抑うつや自己への攻撃性とも正の相関を示すことが明らかにされており (齋藤・沢崎・今野, 2008)、不安やストレスといった精神的な不適応との関連が示されている (桜井・大谷, 1997)。こうしたことから完全主義に対する何らかの心理的アプローチが求められるが、自己に対する完全主義はいくつかの研究において個人の中の安定したパーソナリティ特性として位置づけられており (桜井・大谷, 1997 ; 小堀・丹野, 2014)、完全主義そのものは変容し辛いことが示唆されている。

Rudolph, Flett, & Hewit (2007) は、完全主義者には特徴的な認知的感情制御が見られることを明らかにしており、完全主義者はその傾向が高いほどより不適応的な認知的感情制御を用いやすいことを示している。これらのことから、完全主義がどのような認知的感情制御を媒介するのかにより、強迫傾向に及ぼす影響は異なると考えられる。しかし、完全主義と認知的感情制御の関連および認知的感情制御が精神的健康に及ぼす影響については検討されているものの、完全主義が認知的感情制御を介し強迫傾向に及ぼす影響について検討している研究は見受けられない。そこで本研究では、認知的感情制御を媒体として、完全主義が強迫傾向に及ぼす影響について明らかにすることを目的とする。

2. 方法

2019 年 11 月から 2020 年 1 月に、東京都の私立大学に通う学生に質問紙を配布し、回答を求めた。回答者 216 名のうち、フェイスシートを除くいずれかの質問項目に不備のあった回答者を除いた 201 名を最終的な分析対象とした。平均年齢は 19.86 歳 (SD=1.26) で、男性 70 名、女性 117 名、性別未回答は 14 名であった。欠損率は 3.0% であった。

使用尺度 (a) 強迫傾向尺度 : Hodgson and Rachman (1977) が作成した Maudsley Obsessional-Compulsive Inventory (以下 MOCI とする) の日本語版 (細羽・内場・生和, 1992), (b) 完全主義尺度 : Burns (1980) の作成した完全主義尺度の日本語版 (桜井・大谷, 1994), (c) 認知的感情制御尺度 : Garnefski, Kraaij, & Spinhoven (2001) が作成した Cognitive Emotion Regulation Questionnaire (以下 CERQ とする) の日本語版 (榊原, 2015) の 3 つを使用した。

分析 下位尺度ごとに記述統計量、相関係数をそれぞれ算出した。その後、強迫傾向の Cleaning, Checking, Doubting のそれぞれを従属変数として共分散構造分析を行い、仮説モデルの検証を行った。

3. 結果

Checkingにおける仮説モデルでは、完全主義から9つの認知的感情制御に、9つの認知的感情制御からCheckingに、それぞれパスを仮定した。また、9つの認知的感情制御には共分散を仮定した。分析の結果、得られた適合度はGFI=.989, AGFI=.291, CFI=.983, RMSEA=.238であった。そこで有意でなかったパスを削除し再び分析した結果、得られた適合度はGFI=.971, AGFI=.898, CFI=.977, RMSEA=.064となったため、このモデルを採用した。完全主義は大局的視点、反芻、受容、自責、他者非難、破局的思考に正の影響を及ぼしていた。また、破局的思考はCheckingに正の影響を及ぼしていた。

Cleaningにおける仮説モデルでは、完全主義から9つの認知的感情制御に、9つの認知的感情制御からCleaningに、それぞれパスを仮定した。また、9つの認知的感情制御には共分散を仮定した。分析の結果、得られた適合度はGFI=.986, AGFI=.048, CFI=.976, RMSEA=.281であった。そこで有意でないパスを削除し再び分析した結果、得られた適合度はGFI=.971, AGFI=.894, CFI=.975, RMSEA=.068となったため、このモデルを採用した。他者非難と破局的思考はCleaningに正の影響を及ぼしていた。

Doubtingにおける仮説モデルでは、完全主義から9つの認知的感情制御に、9つの認知的感情制御からDoubtingに、それぞれパスを仮定した。また、9つの認知的感情制御には共分散を仮定した。分析の結果、得られた適合度はGFI=.986, AGFI=.091, CFI=.979, RMSEA=.274であった。そこで有意でないパスを削除し再び分析した結果、得られた適合度はGFI=.971, AGFI=.873, CFI=.973, RMSEA=.080となったため、このモデルを採用した。肯定的再評価と肯定的再焦点化はDoubtingに負の影響を及ぼしていた。大局的視点、反芻、破局的思考はDoubtingに正の影響を及ぼしていた。

4. 考察

完全主義は大局的視点、反芻、受容、自責、他者非難、破局的思考に対して正の影響を及ぼしており、認知的感情制御の種類によって、その後の強迫傾向に及ぼす影響は異なることが分かった。

また、Checkingは破局的思考からのみ正の影響を受けており、完全主義が破局的思考を介してCheckingを高めていることが分かった。このことから、完全主義傾向が高い人は不安なことがあった際に「どれだけひどい出来事が起こるか」というような破局的な思考が浮かびやすく、その結果を招かないように確認するといったCheckingの症状を高めていると考えられる。当然ながら、臨床群である強迫症患者においては、Checkingが日常生活に支障を来すものになると考えられるが、強迫傾向者の場合は心配性という健全な範囲内の傾向に留まると予想される。しかし、破局的思考以外の感情制御方略がCheckingに影響をおよぼしていないことを考慮すると、臨床域のCheckingを予防するためには、強迫傾向者の破局的思考にアプローチすることが有効であると考えられる。

Cleaningは他者非難と破局的思考から正の影響を受けており、完全主義が他者非難と破局的思考を介してCleaningを高めていることが分かった。このことから、完全主義傾向が高い人は不快な出来事の原因を他者に帰属しやすく、汚染をもたらす状況や外的な刺激は他者のせいであると感じて取り除く可能性が考えられる。実際に強迫症患者の中には家族などの他者に強迫行為を代行させる巻き込みと呼ばれる症状を呈する者もいるが、汚染恐怖ではその傾向が特に高いかもしれない。破局的思考に関しては、完全主義傾向が高い人は「菌が付くとひどい病気になってしまうのではないか」といった破局的な思考を発展させやすく、Checkingを高めていると考えられる。

Doubtingは大局的視点、反芻、破局的思考から正の影響を受けており、完全主義が大局的視点、反芻、破局的思考を介してDoubtingを高めていることが分かった。また肯定的再評価と肯定的再焦点化からは負の影響を受けており、完全主義傾向に関わらず肯定的再評価と肯定的再焦点化がDoubtingを低めることが分かった。このことから完全主義傾向が高い人は、比較対象として別の出来事を思い出す、現在の不安について繰り返し考える、また現在の不安がどれほどひどいものであるか考えることなどによって結果的に現在の疑念について思考する機会も増え、増々自己に対する疑念が高まってしまふと考えられる。また完全主義傾向の高さに関わらず、ポジティブな考え方をしたり不安なことから意識をそらすことで、自己に対する疑念が低くなっていくと考えられる。

5. 本研究の限界と今後の展望

本研究によって示された結果は完全主義と認知的感情制御、および強迫傾向の関連を検討するものであった。しかし調査対象者の偏り、使用尺度、強迫傾向の臨床群と健常群の様相の違い、用いるデータ

と解釈の方法などの点において、本研究では今後更なる検討が必要と考えられる。

本研究では、完全主義が認知的感情制御を介して強迫傾向に及ぼす影響について検討した。その結果、完全主義は大局的視点、反芻、他者非難、破局的思考に対して正の影響を及ぼしていることが分かった。一方各認知的感情制御がその後の強迫傾向に及ぼす影響は、認知的感情制御の種類によって異なることが明らかになった。これらのことから、完全主義は特定の認知的感情制御に影響を及ぼし強迫傾向を高めるが、強迫傾向のタイプによって、介入する必要がある認知的感情制御は異なると考えられる。

6. 主要な参考文献

Rice, K. G., Suh, H., & Davis, D. E. (2018). Perfectionism and emotion regulation. In Joachim, S. (Ed.), *The psychology of perfectionism*(pp. 243-262). Routledge: Taylor & Francis Group.